

## 女子部中等科・高等科

### コロナ禍での生活「女子部の食事作りと昼食」

片山百合子

1学期間のオンライン学習を終え2学期から登校を再開するにあたり、女子部でこれまで続けてきた生徒による食事作りと全員が食堂に集まる食事時間の見直しを行った。感染リスクを抑えつついかに食の学びを継続させていくか、生徒教職員ともに試行錯誤を重ねながら新たな昼食時間の在り方を模索した。

#### I. 新たな食事作りおよび提供体制の検討

2学期からの昼食の提供については6月末から健康管理室や食糧部とともに議論を重ねた。集団調理における感染リスクは大量調理マニュアルを遵守することで抑えられることが確認されたため生徒による食事作りは可能と判断し、配膳から下膳までのプロセスを一つずつ検討した。

食堂に集まる場合は全員が一方を向き、前後1メートルの距離を確保する必要があるが、この配置では生徒の約半数（110名）しか座ることができない。昼食を二交代制にして半数ずつ食堂に入ることも考えたが、配膳や下膳が煩雑になることや感染拡大がさらに進んだ場合には教室で昼食をとる可能性があることを踏まえ、食堂と教室に分散して食べることを決めた。（図1）また、感染者が出た場合に濃厚接触者を特定できるよう、食堂の座席は出席番号順で固定した。

さらに自治区域として労作に行ってきた食堂掃除をやめ、後片付けの生徒の中から食堂の係を出して食事後の清掃や消毒を徹底することとした。これに伴い後片付けにかけられる時間が減ったため、使用食器はランチ皿のみに変更、昼食はワンプレートで提供することと各自水筒を持参することを決めた。

#### II. 料理教員による食事作り（8月24～31日）

生徒による食事作りは段階的に再開することとし、始業式翌日から8月末までは料理教員が作った食事を提供した。まずは食事前の検温や手洗い、

環境消毒など新たな生活様式に慣れるためである。この期間、通学生と教職員は弁当を持参して提供食数を110食に限定した。委員が朝の掃除時間に行っていた台所準備がなくなったこと、本鈴が遅くなり生徒による朝の料理準備ができなくなったこと、また不特定多数が配膳に関わるのを避けるため個々の皿への盛り付けも調理時間内に行うことなど、これまでと違う体制の中で下処理から盛り付けまでを2時間弱でいかに仕上げるか、課題が多く見つかった。

#### III. 生徒による食事作り再開（9月1～12日）

9月からは生徒による昼食作りが再開された。提供食数は引き続き110食とし、新体制での調理に慣れるための期間とした。作業ごとのこまめな手洗い、器具の使い回しをしないなど新たなルールが増えたことに加え、生徒にとっては半年以上ぶりの学校での料理ということもあり、食数は少なかったが時間内に食事を提供することで精一杯であった。

#### IV. 全生徒教職員分の食事作り再開（9月14日～）

最終段階として9月14日から女子部全生徒と教職員250人分の食事作りを再開した。これに先立ち、料理教員と高等科3年の食主任を中心に各教室へのお運びや配膳下膳をどのような流れで行うか話し合い、食主任から全校へ昼食時間の新たな約束事が報告された。

一方、4単位目終了後すぐに各学年の配膳係が

料理を取りに来るため（図2、3）、12時10分までに全ての料理を仕上げなければならなくなった。食数が増えたことと実質的な調理時間が短くなったことで料理提供が間に合わない日が続き、このことから10月12日より基本時間を変更し、食事開始を12時40分とした。

食事の報告はこれまで通り食堂で行い、Zoomで各教室に配信するようになった。当初は料理リーダーの報告のみだったが、習字解説や様々な係からの諸報告なども徐々に再開された。また、保護者料理は当面中止となり生徒が食事作りをできない日にはパン工房製品の提供が増えた。

11月には生徒が新体制に慣れてきたことや温かい汁物が食べたいという要望もあり、使用食器を増やし献立の幅を広げることとした。

#### V. 二度目の非常事態宣言による食事作り中止 (1月13～27日)

3学期を控えた1月8日、東京都に非常事態宣言が再発令された。

生徒による食事作りは当面中止となり、この間は女子部教職員が交代で食事作りを行った。様々な教科の教員が台所に立ち料理をしている姿は生徒にとって非常に新鮮だったようで「今日はどの先生が担当ですか」と嬉しそうに聞いてくる生徒が多くいた。また年度末に提出されたまとめでは、教員によって手作りの昼食が守られたことに対する感謝の気持ちを綴る生徒が多く見られた。

国立感染症研究所 菅原氏の助言もあり1月28日より生徒の食事作りが再開される運びとなった。

#### VI. 最後に

全員で集まり食卓を囲んできたこれまでの昼食は、多くの生徒が楽しみにしていた時間であり、心安らぐひとときでもあった。一つの場所で同じ体験を共有することで培われてきた女子部の一体感もあったように思う。以前のような食事時間を取り戻したいという生徒の声もある。その喪失感や以前のような一体感、コロナによって失われたものを新たな形で再構築していくことが次のステップで求められていると感じている。

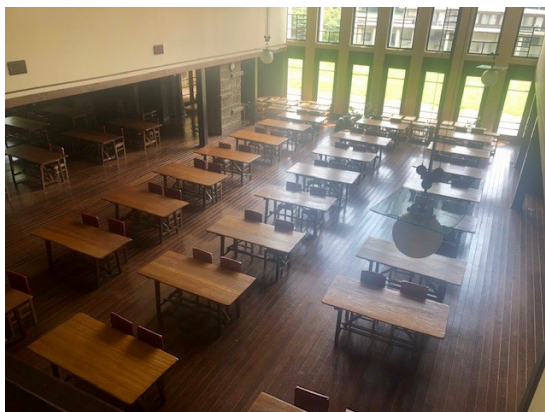


図1. 新しい女子部食堂のテーブル配置



図2. 4単位目終了後、食事を教室へ運ぶ



図3. スモックを着た配膳係が1人分ずつ盛り付ける